コロナ禍での対人コミュニケーション場面における マスクの役割と意味の変化について

保坂裕子・藤田彩夏・米津実咲・脇坂柚希・和田あみ・渡辺実久
人間環境部門、兵庫県立大学環境人間学部[1]

The Impact of Changing Roles and Meanings of Face Masks in Interpersonal Communication Situations with COVID-19

Yuko HOSAKA, Sayaka FUJITA, Misaki YONETSU, Yuzuki WAKISAKA, Ami WADA, Miku WATANABE[1]

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: The global spread of the COVID-19, began at the end of 2019 has drastically changed our daily lives, and it is becoming the new normal in public places to avoid human contact, so-called SANMITSU, and to wear a face masks. This type of lifestyle will have no small psychological impact, not to mention its influence on behavior in daily life. In this study, we surveyed university students regarding the wearing of face masks, which may have an impact on interpersonal communication. Impressions about the face mask itself changed significantly before and after the coronal disaster, and impression formation also changed. The results also suggest that the meaning of mask-wearing communication may vary depending on how one perceives the act of wearing a mask. It is desirable to continue to examine how the wearing of face masks is perceived and has psychological impact.

Keywords: COVID-19, Face masks, conformity, peer pressure, majority bias

１．はじめに

日本において、2020 年頃から確認されるようになった新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により、日常生活は新しい様式へと変化してきた。コロナ禍以前とは異なり、感染防止のために三密（密集、密接、密閉）を避け、こまめに手洗いや消毒をして、マスクを着用することが推奨されるようになった。以前は、風邪や花粉症の予防として活用されてきたマスクは、外出時の必需品として扱われるように変化している。対人コミュニケーションにおいても、一定の距離をとり、換気された環境で、マスクを着用した状態のまま行われる機会が増加してきた。そして教育現場では、マスク無しのオンライン授業の機会とマスク有りの対面授業両方のコミュニケーション機会が混在するようになった。このようなコミュニケーション環境の変化は、コミュニケーションにわたしたちが求めるものやその定義を問い直す機会となった(保坂他, 2021 など)。

さらにマスク着用時のコミュニケーションについては、マスクが顔の下部を覆い隠すことで口元が見えないため、適切に表情を読み取ることが困難になり、相手の感情を誤認してしまう場合があるとして表情認知に大きな影響を与える（田辺・西沢, 2009）という指摘や、マスクをつけることで発声が妨げられて音声を聞き取りにくくなってしまうため、コミュニケーションにおいて抑揚を意識

することや話す速度をゆっくりにすることが重要だ（佐藤ら, 2014）という分析もある。多くの人々が、コロナ禍で互いにマスクを着用している機会が増加したことによって、対人場面でのコミュニケーションに、以前までとは違う何かを感じとっているだろう。

また、マスク自体の種類についても、多くの人が着用するようになったことで、不織布やウレタン、布などの素材、白や黒以外にもパステルカラーや柄物をはじめとした多種多様なマスクを目にする機会が増加した。

たとえば伊藤・河原（2019）は、大学生を対象にマスクの色（白色マスクと黒色マスク）による違いに着目して、マスクを着用している人物に対する印象や顔の魅力の知覚に及ぼす影響について調査を行った。その結果、白は良い、黒は悪いとする回答が多く、白色マスクより黒色マスクを着用した人物の方が、魅力度が低いと評価される傾向があった。そして、魅力、ファッション性、健康さ、イメージの良さの4項目全てにおいて、黒色マスクを着用している人物はネガティヴに見られていると分かった。ただし、この調査はコロナ禍以前に行われたものであったため、鎌谷ら（2021）は、大学生を対象に、COVID-19 感染症流行後にマスク着用機会が増加したという背景から、黒色マスク着用者への顕在的・潜在的態度が変化したのではないかということに着目して調査を行った。その結果、黒色マスク着用者に対する魅力・ファッション性・健康さにおいては、COVID-19 流行前とは異なり、肯定的・中立的に評価されるようになっていた。これは、マスク着用者が増加したという環境が、黒色マスク着用者は不健康だという認識を弱めるとともに、白色マスク着用者よりも黒色マスク着用者の方が少なく、希少性があったということから、魅力やファッション性が高く評価されやすくなったためと分析されている。また、黒色マスク着用者に対するイメージの良さについては、COVID-19 流行前と同様に否定的に評価されやすい傾向のままであった。これは、社会的に黒色が忌避されやすいという認識が根強いからではないかと指摘されている。いずれにしても、マスクという現状の対人コミュニケーション場面では欠かすことのできない媒体が、人物評価に少なからず影響していることがわかる。マスク着用が一般的となってきたことで、黒色マスクを見かける機会が増加し、白や黒以外の色や様々な見た目のマスクを目にする機会が増えてきたことで、黒色マスク着用者に対する意味づけが複雑化してきているとも考えられる。

さらに、マスク着用の理由として、榊原・大薗（2021）は、新型コロナウイルスの流行に伴って、マスク着用が推奨されるようになり、マスクが効果的であるという認識が定着してきたことによって、自己の感染予防という意識が強まったとしている。加えて、他者のマスク着用を目にすることが、自身のマスク着用を促進しているとも指摘した。屋外や人が少ない状況でマスク着用の是非を悩むようになったというのも、自分以外の他者の様子や周囲の状況が背景にあると指摘している。一方で Nakayachi et al.(2020)では、2020 年 3 月に実施したマスク着用についての調査において、マスク着用に関連するものとして正の相関が示されたのは、社会的同調に関する項目であり、感染予防対策とは関連が示されなかった。つまり、「みんながしているからしなければ」といった集団の多数派にあわせてしまうというような同調圧力の影響ともとらえられる状況にあり、人々がマスクを着用するのは、感染を予防する目的のみではないと考えることができる。

以上のように、実際の対話や印象をはじめとしたコミュニケーション機会において、マスクの役割や意味はコロナ禍前後で変化していると想定される。

２．本研究の目的

本研究では、COVID-19 の影響により、マスクをつけることが当たり前とされるようになった社会状況のなかで、大学生を対象として、マスクの役割や意味の具体的変化を明らかにすることを目的とした。近年、社会様式が大きく変わってきたコロナ禍において、他者とのコミュニケーション機会でマスクを着用しているという状況が日常的だと感じる人が増加したと考えられる。マスクそのものに対しても、選び方が変わったという人が約7割、状況によって使い分けているという人が 5 割以上いた（PRTIMES, 2020）。つまりマスク自体が、コロナ禍以前と比較して、より身近で親しみやすい存在になってきていると捉えることもできる。しかし、先に指摘されていたように、マスクという物理的な障害物があることで、見えない・聞こえにくいといった問題が発生し、表情や音声の知覚に影響を与えている点は変わらない。また、白や黒といった色によって、マスクをつけている人物の評価が影響をうけることもわかっている。つまり、マスクの有無やどのような見た目のマスクを着用しているのかということが、対人コミュニケーションにこれまで以上に大きく影響をもたらしはじめたのである。さらに、マスクを着用するか、しないかという判断基準として、個人的な感染予防のみが理由ではなくなり、マスク着用そのものが社会的諸関係において複雑な意味をもつようになってきている。

そこで本研究では、対話や授業、外出といった様々な

コミュニケーション機会をもち、コロナ禍において、非対面と対面両方の交流を経験した大学生を対象に、質問紙調査および個別のインタヴュー調査を実施し、対人コミュニケーション場面におけるマスクの意味の変化について検討することとした。そして、コロナ禍が1年以上も続き、マスク生活の経験が深まった状況のなか、対人コミュニケーションにおける表情認知や音声以外のマスクによる影響、白や黒以外の色・柄や素材によって印象に違いがあるのかを確認するとともに、具体的なエピソードや観点を分析していくことにした。質問紙調査（研究Ⅰ）では、マスクを選ぶ基準や使い分けなどコロナ禍前後での変化、マスクの種類別の印象を中心に回答を求めた。つづくインタヴュー調査（研究Ⅱ）では、質問紙調査の内容を具体的に検討するとともに、マスクから受けるほかの人の印象やマスク生活について具体的な体験を自身の言葉で語ってもらった。

３．質問紙調査【研究Ⅰ】

COVID-19 に大きく影響を受け、日常生活に加え、学生生活の新たなスタートの変更を余儀なくされた大学生ら計 197 名に、COVID-19 拡大後のマスク購入基準の変化およびマスクの色や柄と印象、そしてマスク生活に関する質問紙調査を実施した。

①調査対象：大学生 183 名、短大・専門学生 10 名、社会人 4 名の合計 197 名。

②調査方法：Google フォームを利用し、大学の講義や SNS を通して回答を得た。

③調査時期：2021 年 10 月下旬～2021 年 11 月中旬

④調査内容（付録参照）

・普段使用しているマスク
・マスクの使い分けの基準
・マスクの購入基準
・他人のマスクで気になる点
・初対面で話しかけやすいマスクの順位づけとその理由
・マスクありの生活とマスクなしの生活では、どちらの方が良いかとその理由

⑤調査結果

1）マスク購入基準の変化

初めに、COVID-19 感染拡大前で 30%以上の調査対象者が回答しているのは、「値段」と「サイズ」の二項目であるのに対し、COVID-19 感染拡大後では、「値段」、「色」、「種類,素材」、「サイズ」、「着け心地」の 5 項目で 30%以上の調査対象者が回答したという結果になった（図 1，2 参照）。

図１　COVID-19 感染拡大以前のマスク購入基準

図２　COVID-19 感染拡大後から現在のマスク購入基準

次に、普段使っているマスクについて、1 つ目の設問と同様に COVID-19 感染拡大前後で分けて質問した。COVID-19 感染拡大前では不織布が 190 人、ウレタンが 15 人、布が 9 人であったのに対し、COVID-19 感染拡大後では不織布が 186 人、ウレタンが 41 人、布が 43 人という結果であった(図3，4参照)。最も防御力が高いとされている不織布マスクの使用がやや減少し、ウレタンや布マスクの使用が大幅に増加したことが示された。

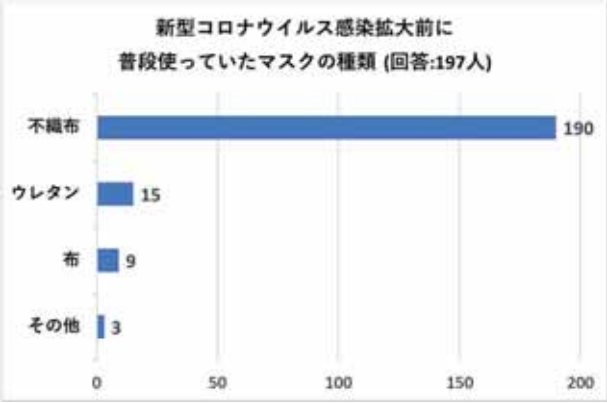

図３　COVID-19感染拡大以前に使っていたマスクの種類

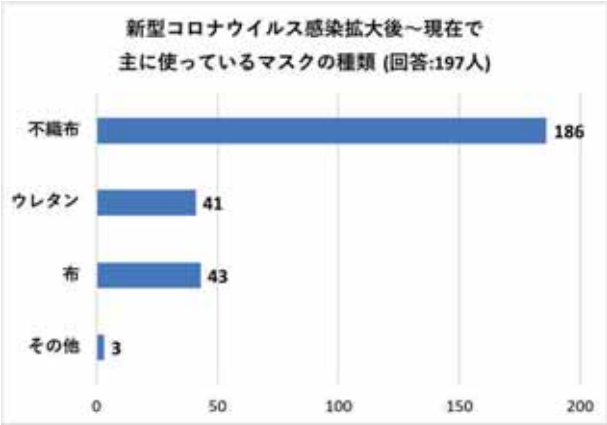

図４　COVID-19 感染拡大後から現在主に使っているマスクの種類

このふたつの結果から、COVID-19拡大前やコロナ禍初期の頃は値段やサイズ、感染予防が重要視されていたことに加えて、マスクの種類が限られていたため、不織布マスクの割合が高かったことがわかった。そしてコロナ禍以降は、マスク生活が長引いたことで生じた様々なデメリットを改善するため、またマスクの種類が豊富になったことから不織布以外の種類のマスクを使う人が増加したと考えられる（図５参照）。

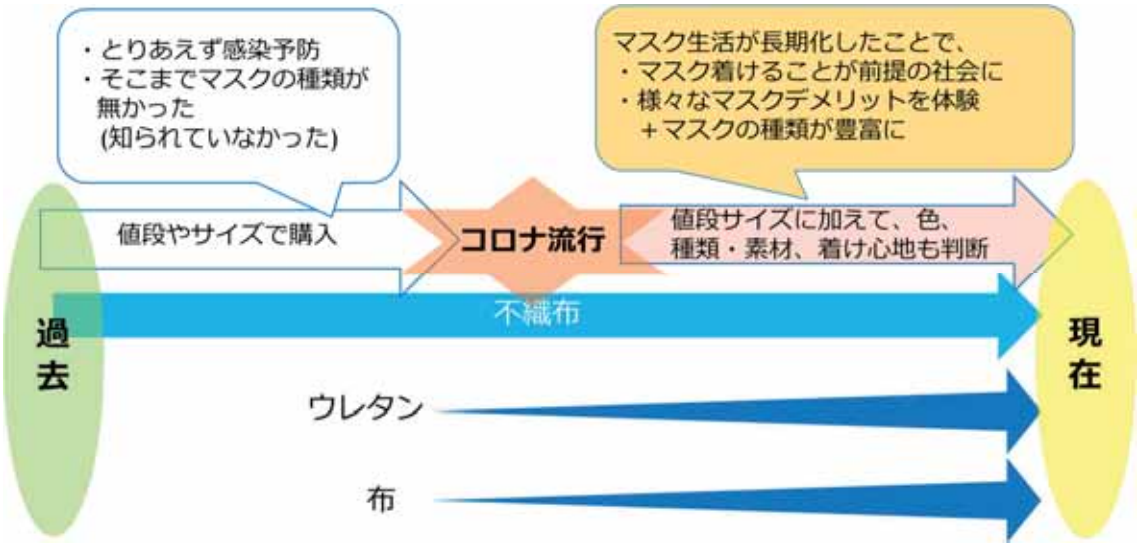

図５　COVID-19感染拡大前後におけるマスク利用形態の変化

２）マスクの色に対する印象

図6に示した6つの画像（①白、②薄ピンク、③黒、④強い花柄、⑤濃い紫、⑥弱い花柄）に関してそれぞれ印象が良い順に並び替えてもらい、さらにその理由「問 11（写真並び替えの問）の順番に回答した理由を教えてください」と記述式で回答するようもとめた。

結果として、全体の中で①や②を並び替え順位の１番目または２番目に配置した回答は197件中154件見られた。また、並び替え順位の１番目に配置されたもので多かった順に、②>①>⑥>④>③>⑤であった。

図６　使用したサンプル画像

図7に示したように全体の傾向として、①②⑥のような明度の高いもの、柄・発色の主張が控えめなもの（あまり派手でないもの）、見かける頻度の高いものに対して好印象を抱くことがわかった。その理由として、まず白や淡色に対しては「優しそう」「明るい性格に見える」などの印象を抱くという回答が多く見られた。一方、黒に関して見慣れているという趣旨の意見も数件みられたものの、「怖い」「話しかけづらい」などの意見が多数見られたことから、全体としてあまり良い印象を持たれないことが判明した。つづいて、濃い（暗い）（③⑤が該当）色に関しては「暗い性格に見える」、柄・発色が派手なもの（④⑤が該当）に対しては「個性的に見える」「変わった人に見える」「話しかけづらい」などの理由から敬遠される傾向がある。また、最も目にする頻度の高い白色のマスクに関してはごく少数ながら、「個性がない」「普通すぎる」などの意見もみられた。

図7　好印象を抱く要素の傾向

以上の結果から、全体として目立つ人物とかかわりたくないという意識がもたれることがわかった（図8）。

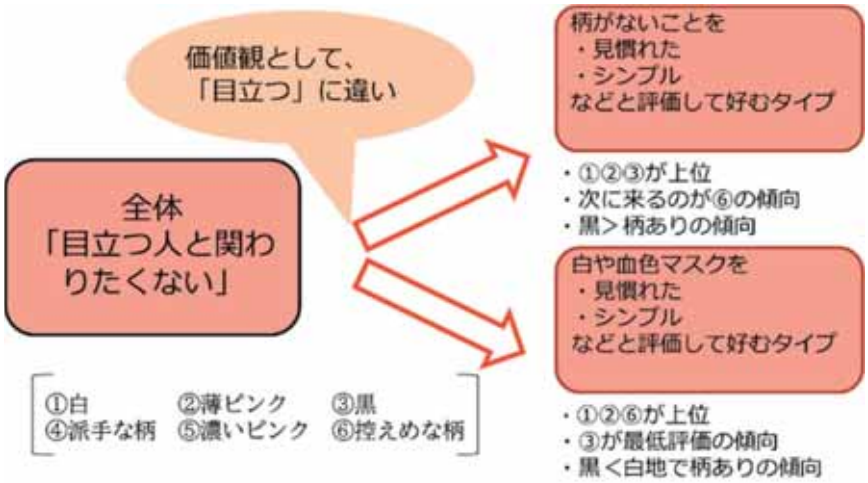

図8　マスク並び替え理由の分析

更に分析を進めると、この「目立つ」に関しては大きく2つの価値観のグループに分類できた。1つ目は「柄がないこと」に重点を置くグループである。こちらのグループはアンケートの結果として①②③を上位にする傾向があり、次いで⑥を配置する傾向がある。また、③と④では黒色マスクをより上位に配置することからもこのようにグループ分けを行った。2つ目のグループは「白や淡色（特に血色マスク）」に重点を置くグループである。このグループは①②⑥を上位にする配置が多く、黒色マスクは最低評価とする者が多く見られた。このグループでは派手マスクに対する「目立つ」「奇抜すぎる」という印象よりも、黒に対する「怖い」等の印象の方が負の感情を抱きやすいため、派手なマスクと黒マスクでは前者を選ぶ傾向となったと考えられる。

3）マスクありの生活とマスクなしの生活に対する評価について

「マスクありとなしの生活ではどちらが良いですか」という問いに加えてその理由の回答を求めた。結果については「なし」が54.3%「どちらともいえない」が34.5%「あり」が11.2%となった。一方その理由については特にメリット・デメリットについて言及していたものが197件中50件あり、特に目立っていた。このことより、何か一つの理由でマスクあり・なしを判断することは難しいと感じていることがわかる。具体的なものとして図9で示す回答が多くみられた。特にマスクの最大の視覚的特徴である「顔が覆われること」に関するものが圧倒的に多く、この特徴をメリットととらえるかデメリットととらえるかで違いがみられた。メリットとしてあがったの

は、「メイク・ひげを隠すことができる」「素顔に自信がないため・コンプレックスがあるため隠したい」「表情を気にしなくて良い」などであった。ここにみられたような認識は、マスク着用に関して、「隠す」ことへの安心感を指摘した吉澤ら(2022)に通じるものであった。

一方、デメリットとして挙がったものとして「相手の表情が分からない」「素顔が判別できない・素顔を覚えられない」「メイクを楽しめない」などが多くみられた。また、その他のメリットとしてはコロナそのものを防ぐ効果や咳・飛沫の侵入防御など衛生面に関するものもあがった。デメリットとしては「息苦しい」「肌荒れする」「マスクを取った時のギャップが嫌」などが多く見られた。本研究においても、マスクの役割に「感染予防」「社会的同調」「隠す安心感」が示されたといえよう。

先行研究における数量的検討と、本研究の質的検討から、マスク着用のメリットに注目する観点では、自己を中心とした「守る・隠す」を意識したものが多い傾向があり、デメリットに注目する観点では、他者を念頭に置いた対人場面における表情の読み取りづらさなど「生活・物理的な支障」を意識したものが多い傾向があることがわかった。マスクの着用は、自分のことだけで考えると、安心感をもたらすが、他者との関係を想定した対人場面においては、コミュニケーションに支障をきたすものであるととらえられていた。

また同質問への回答の中で、いずれの回答もごくわずかではあるが、マスクを着用しない姿が本来の姿であるためマスクなしの生活がよいとしたものが 3 件、マスクを着用した姿が今の社会では当たり前であるためマスクありの生活がよいとしたものが 9 件という結果となった。マスクの有無と、それぞれが自己と社会との関係をどのようにとらえているか、つまり、ありのままの自己を表現することを優先する人と、社会におけるコミュニケーションを前提とした自己表現を考える人がいることが、マスクについての評価にも影響しているものと考えられる。さらに相対的にマスクによる衛生面への言及が 8 件と少なったことから、COVID-19 感染拡大を境に、マスクそのものの位置づけが変化したが、現状では感染予防や衛生面での認識よりも、自己表現や社会的位置づけといった心理的背景のほうがマスク着用により大きな影響を及ぼしていることがわかる。次に、マスクの意味づけについて個々の語りをもとに検討する。

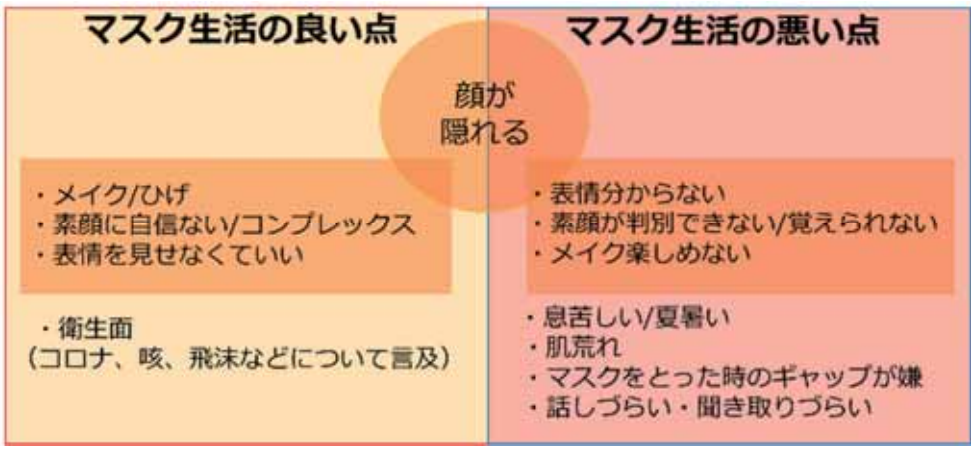

図９　マスクあり・なし生活に関して

４．　インタヴュー調査【研究Ⅱ】

①調査対象：兵庫県立大学の学生 10 名。なお、調査協力者は、研究Ⅰの質問紙調査において、インタヴュー調査への協力を申し出てくれた学生である。

②調査方法　姫路工学キャンパスまたは姫路環境人間キャンパスにおいて、対面で実施。調査の目的および調査にあたっての事前説明の後、インタヴューイーの承認を得て、インタヴュー内容を録音し、その後文字おこしを行ったものを発話データとして分析対象とした。

③調査時期　2021 年 11 月下旬～12 月下旬

④調査内容

〇マスクについて（選ぶときの基準）

・マスク購入時に気にしていること

・選ぶ際に他人を気にするか

〇マスクから受ける他の人の印象

・同一人物が異なるマスクを着用している写真を見てそれぞれに持った印象

・印象に残っているマスクをつけた人についてのエピソード
○自身のマスク生活について
・マスク生活のメリット
・自身がマスクをつけていて困ったこと
○マスク生活の評価
・このままマスク生活が続くことについてどう思うか
・もしまわりの人がマスクを外し始めたらどうするか

⑤調査結果

インタヴュー対象者の発話から、マスクに対するそれぞれの意味づけを分析したところ、次の三つのグループにわけることができた。まず、「予防とか、感染させたくない」「マスクしてないとあんまり気使ってない人なんかなあって思う」「他の人にもうつさない、自分もうつらないためにつける」といった、感染対策を重視した発言が多かった、「①感染対策重視グループ」である。次に、「コロナ前はマスクを見てお洒落とかって印象はなかったかなあ」「（マスクを選ぶとき）他人を気にするかなあ・・・好印象を持たれたい」「自分の服と合うかが大事ですね」といった、自分をどう見せるか、まわりにどのようにみられるのかといった、見た目を重視した、「②ファッション重視グループ」である。そして、「アベノマスク、みんながつけてたら使ってたかも・・・」「マスク忘れちゃったら、まわりの目が気になるかな」といった、自己の価値観による判断というよりは、周囲の基準に合わせ、まわりと同じであることを重視した、「③周囲との調和グループ」であった（図10参照）。

	①感染対策重視	②ファッション	③周囲との調和
マスクを選ぶ基準	抗ウイルス性 飛沫対策	小顔に見えるか 血色がよく見えるか	一般的であるか どうか
マスクのメリット	顔が隠れる安心感	メイクなしでいい	周囲から浮かない
色・柄	一般的なものが好印象	ファッション性・統一感 を重視	一般的なもの(白・無地)
付け方	飛沫対策 隙間が少ない	飛沫対策 小顔に見えるかで調節	鼻と口が隠れるように
コミュニケーション	表情が見えない 声が聞こえにくい	表情が見えない 声が聞こえにくい	一般的ではないマスクの 人には話しかけづらい

図10　発話をもとにした分析結果

感染対策を重視する発言の多い①感染対策重視グループは、抗ウイルス性かどうかでマスクを選び、マスクのメリットとして顔が隠れる安心感をあげた。色や柄は一般的なものを好み、マスクのつけ方においては隙間が少ないことが重視される。コミュニケーションにおいて困ることとしては、表情が見えないことや声が聞こえにくいことがあげられた。

見た目やファッション性を重視する発言の多い②ファッション重視グループは、小顔に見えるかや血色が良く見えるかでマスクを選び、マスクのメリットとしてメイクをしなくていいこと、ヒゲを剃らなくていいことを挙げた。色や柄はファッション性のあるものや服装との統一感の出るものを好み、マスクのつけ方においては小顔に見えるかが重視される。コミュニケーションにおいて困ることとしては、前者と同様に表情が見えないことや声が聞こえにくいことがあげられた。

周囲との調和を重視する発言の多い③周囲との調和グループは、一般的であるかどうかでマスクを選び、マスクのメリットとして周囲から浮かないことをあげた。色や柄は一般的なものを好み、マスクのつけ方においては鼻と口が隠れることが重視される。コミュニケーションにおいて困ることとしては、一般的ではないマスクを着用している人には話しかけづらいことがあげられた。グループごとの差異をもっとも示していたのは、マスクを選ぶ基準である（マーカー部分）。また、この３つの分類はさらに、①は感染対策重視の発言、②と③は見た目重視の発言という２つのグループに分類できる。

本来のマスクの役割は感染対策であるが、見た目重視の発言が多かったインタヴュー対象者は全体の 80%であった（①20%、②60%、③20%）。つまり、マスクをつけることが日常化したCOVID-19以降のニューノーマルといわれる現代社会において、マスク本来の役割とは違う意味を意識している人の方が多いことがわかった。

５．考察

研究Ⅰの質問紙調査および研究Ⅱで行ったインタヴュー調査の分析結果より、COVID-19 の感染拡大を境に、マスクの役割と意味づけが大きく変化したことがわかった。マスク購入の基準の変化をはじめ、日常生活にマスクが不可欠となったことにより、マスクの着用が自己と他者とのかかわりで意味づけられるようになったり、さまざまな対人コミュニケーションのあり方に、より大きな影響を及ぼすようになった。

まず、表情認知や音声以外のマスクによる影響を考察していく。本研究の結果により、マスクを着用する際には同調圧力が働いているのではないかという結論に至った。COVID-19 以降のマスク着用に関して、他者への社会的同調による影響が示されることは、同時期に行われた他の研究の示すところでもある(Nakayachi et al., 2020; Sakakibara & Ozono, 2020)。ただし本研究においてはさらにインタヴュー調査にて、自分がマスクをつけるとき、みんながつけている状況が重要であるか質問したことによって、周囲の人がマスクを着用している、着用していないという状況に加え、誰が他者として想定されているかによって、自分もマスクを着用する、着用しないという判断に影響を受けることがわかった。具体的には、友人や他人がマスクを着用している状況では自分も着用するのに対して、友人がマスクを着用していない状況では自分も着用しないが、他人がマスクを着用していないならば自分は着用すると判断していた（図 11 参照）。

周囲の状況	自分
友人がつけている	つける
他人がつけている	つける
友人がつけていない	つけない
他人がつけていない	つける

図 11　周囲の人との関係とマスク着用の有無

マスク着用の是非については、世界的にも意見が分かれるところでもあるが(2022 年現在)、マスク着用が感染予防に一定の効果があると考えられていることが、他人がつけていないときには自分がつける、としているところからもうかがえる。この点については、まわりに合わせてマスクはつけない、という行動はみられないようであった。現時点での日本においては、公共の場所や人が集まる場所でのマスク着用が推奨されており、「世間」や他者一般といった大多数に対して同調していると考えることができるだろう。一方で、友人がマスクを着用していない状況で自分が外すというのは、社会一般の第三者ではなく、具体的人間関係に裏付けられた友人の判断に同調していると考えられる。

このように、漠然としたまわりの目や世間体を前提とした同調というよりも、その都度の状況に応じて、判断が行われていることがわかる。コミュニケーションの相手によって何に対して同調圧力が働き、どのように作用しているのかが変わっていたということである。

マスクは、まだまだ未知の感染拡大状況においては、感染予防の役割を果たしていると考えられている一方で、対人コミュニケーション場面においては、物理的に表情や声を遮断するため、マスクをつけていることによって、心に距離を感じる。物理的な媒体としてのマスクが、心理的な壁として機能し、対人場面においては、よそよそしさをうみだしてしまうため、友人の前ではそのような壁を取り払いたいと感じ、友人がつけていないのであれば、自らもつけない、と判断していた。友人がマスクを着用している場合には、マスクをしている友人にあわせること、つまり同調することが対人関係維持に肯定的に作用すると考えられる（上野ら，1994 など）。その一方で、マスクの着用が感染拡大を防ぐとされている大多数が支持する価値判断に立つと、マスクをしていない他人に対しては、マジョリティへの同調に基づく判断がなされ、自らとは一線を画す壁を作りたいと、マスク装着の意思に影響を及ぼす。対人関係における同調行動については、心理的距離の大きさとの関連が検討されてきたが、ここでは同調をするかしないかの判断基準と考えられるものを「心理的な壁」とした（図 12）。「心理的な壁」というフィルターを通して、対人場面におけるマスク着用の意味が変化しており、コロナ禍におけるマスク着用という行為に影響を及ぼす同調圧力は、どのような場面にだれに対して同調するのかという心理的な壁に影響を受け、正反対の行為となることがわかった。

ただし、友人関係においてマスクの着用が「心理的な壁」と認識されていることによって、感染予防の観点からマスクを着用したいと考えているにもかかわらず、友人がつけていない場合に、つけたままでいにくいという葛藤をうむことも見過ごすわけにはいかない。友人の前ではマスクをつけていることが「心理的な壁」と認識されることによって、自らの感染予防意識に影響を受けることにもなり、さらには対人関係にも影響する。友人と見知らぬ人との間で、マスク着用に対する意味が異なることをふまえたうえで、マスク着用の意味については、さらに検討すべき課題である。

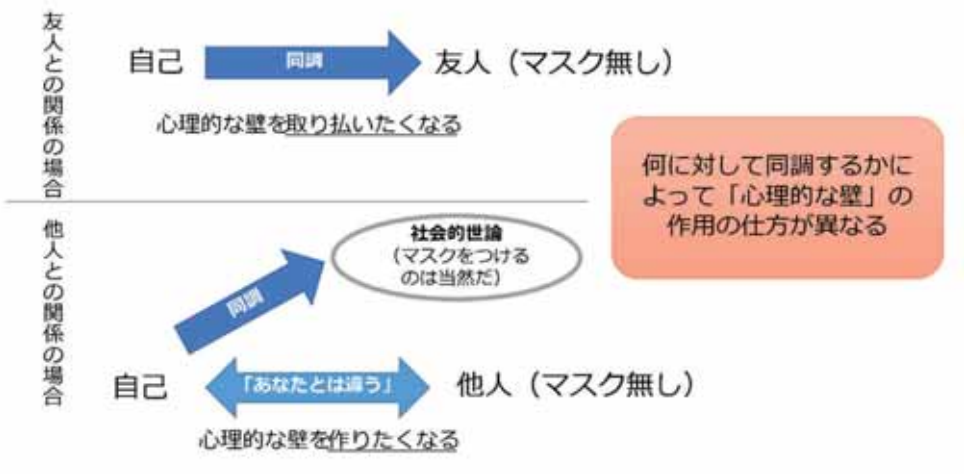

図 12　同調圧力のはたらきと関係性

次に、マスクの白・黒以外の色や柄において、印象に違いがあるのかについて考察する。本研究では、無地の薄ピンクのマスクは好印象、派手な色や柄をしたマスクはあまり印象が良くないことがわかった。前者は見慣れたシンプルなものであるため、優しそう、顔色が良いなどの良い印象に繋がったのだと考えられる。後者は目立つ人と関わりたくないという価値観から悪い印象に繋がったのだと考えられる。今後、マスク生活がどれくらい続くのかは不明であるが、マスクの色が、対人関係における印象形成に大きく影響する可能性が示唆された。

また、マスクの着用が当然になりファッションの一部としてとらえる人が多くみられており、対人場面において、今後も大きな影響を及ぼしうると考えられる。以上のようにマスクの着用は、感染症予防対策としてのみではなく、対人関係に大きく影響しうることがわかった。このことからコロナ禍以前に比べ、マスクがより対人コミュニケーション場面においてメッセージ性を持ったものになったといえる。社会的意味づけも大きくかかわっており、相互に意味づけが関連していることから、今後の対人コミュニケーションへの影響を考える際には、注意が必要である。

6．おわりに

本論文の目的は、コロナ禍におけるマスクの役割と意味の変化を明らかにし、対人コミュニケーション場面への影響を確認することであった。大学生を対象に、質問紙調査およびインタヴュー調査を行い、その結果、以下の二点が明らかになった。

第一に、マスクの色や種類によって異なる印象形成がなされており、対人関係に影響をおよぼす可能性があるということである。他者評価のみではなく、自己のマスク着用行動にもつながりうるものであり、いまや日常生活の必需品となったマスクを通した自己表現やコミュニケーションスタイルにも影響をおよぼすものとなりうるだろう。第二に、マスクが対人コミュニケーション場面においては、心理的な壁となっていることである。そしてその背景には、次元の異なる同調性がみられた。ただ世間の動向にあわせるなど人目を気にしているだけではなく、どのような場面で、誰にあわせるのか、どのような価値判断でつけるのかといった、対人関係における意味づけに応じて、着脱の判断がなされていた。

これらの結果は先行研究において、マスク着用には感染予防に加えて、他者が着用しているかという基準があるという同調行動について、どのような場面でなにに同調するのかが影響するという、さらに踏み込んだ知見を得ることができた。また、表情認知以外にもマスクそのものの色や素材が、対人場面において意味を持つということもわかった。本研究を活かし、今後のコミュニケーションの在り方についてさらに考えていきたい。

参考文献

保坂裕子・芦家幸菜・加藤美沙季・崔紗耶・平松恵実・松田 朋恵(2022)「コロナ禍において非対面コミュニケーションのなにが問題とされたのか：1 年目に入学した大学生を対象とした調査をもとに」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』24, 43-52.

伊藤資浩・河原純一郎（2019）「黒色の衛生マスクの着用が印象と魅力の知覚に及ぼす影響」『北海道心理学研究』41,1-13.

鎌谷美希・伊藤資浩・宮崎由樹・河原純一郎（2021）「COVID-19 流行が黒色衛生マスク着用者への顕在的・潜在的態度に及ぼす影響」『心理学研究』92(5),350-359.

厚生労働省 COVID-19 感染症について https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html(2022 年 8 月 19 日)

榊原良太・大薗博記（2021）「人々がマスクを着用する理由とは―国内研究の追試とリサーチクエスチョンの検証」『心理学研究』92(5),332-338.

Nakayachi, K., Ozaki, T., Shibata, Y., & Yokoi, R. (2020) Why do Japanese people use maks against COVID-19, even though masks are unlikely to offer protection from infection? Frontiers in Psychology, 11.

PRTIMES「マスクに関するアンケート調査」～パステルマスク好調販売のクロスプラスがネット調査の結果発表～ https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000029.000048997.html(2021 年 7 月 15 日)

Sakakibara, R., & Ozono, H.(2020)Psychological research on the COVID-19 crisis in Japan: Focusing on infection preventive behaviors, future prospects, and informamation dissemination behaviors. PsyArXiv Preprints. https://doi.org/10.31234/osf.io/97zye.

佐藤成美・山内さつき・高林範子・石井裕（2014）「音声分析によるマスク着用時のコミュニケーション方法についての検討」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』21(1),45-55.

田辺かおる・西沢義子（2009）「医療者のマスク装着による表情認知の実態」『日本看護研究学会雑誌』32(3),285.

上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994)「青年期の交友関係における同調と心理的距離」『教育心理学研究』42, 21-28.

吉澤裕子・吉澤英理(2022)「COVID-19 流行禍における大学生のマスク着用動機の検討」『容装心理学研究』1(1), 20-28.

付録　質問紙調査質問項目

１　あなたの職業を教えてください。

２　年齢

３　性別

４　コロナ禍のコミュニケーションを最も象徴すると感じるものを選んでください。

常にマスク着用
ソーシャルディスタンス
オンライン○○（授業・会議など）
フェイスシールド越しの対面
三密を避ける
その他（自由記述）

５　新型コロナウイルス拡大以前に、普段使っていたマスクの種類はなんですか？（複数回答可）

布
不織布
ウレタン
その他（自由記述）

６　質問５で複数回答した方にお伺いします。選んだマスクを使い分ける基準はなんですか？（複数回答可）

行く場所
会う人
気分
体調
その他

７　新型コロナウイルス感染拡大後から現在までで、主に使っているマスクの種類はなんですか？（複数回答可）

布
不織布
ウレタン
その他

８　質問７で複数回答した方にお伺いします。選んだマスクを使い分ける基準はなんですか？（複数回答可）

行く場所
会う人
気分
体調
その他

９　新型コロナウイルス感染拡大以前の、マスクの購入基準はなんですか？（複数回答可）

値段
色
柄
種類・素材
抗ウイルス効果
生産国
サイズ
つけ心地
メーカー
自分のファッションに合うか
気にしない
その他

１０　新型コロナウイルス感染拡大後から現在までの、マスクの購入基準はなんですか？（複数回答可）

値段
色
柄
種類・素材
抗ウイルス効果
生産国
サイズ
つけ心地
メーカー
自分のファッションに合うか
気にしない
その他

１１　他人のマスクで気になることはありますか？

色
種類・素材
付け方
特になし
その他

１２　初対面の人が近くに座っているとします。話しかけやすい順に番号を並べてください。（左が最も話しかけやすい番号となるように）

１３　１２の番号順に回答した理由を教えてください。

１４　マスクありの生活となしの生活では、どちらの方がいいですか?

あり

なし

どちらともいえない

１５　１４の理由を教えてください。

１６　兵庫県立大学の学生で、インタビュー調査に協力していただける方は、学籍番号、氏名、メールアドレスをご記入ください。

（令和５年２月７日受付）